

うちを踊ろう

山下 壮 起

奨励者紹介〔やました・そうき〕

日本キリスト教団阿倍野教会牧師

そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリヤの家に入ってエリサベトに挨拶した。マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです。」

(ルカによる福音書 1章 39—45 節)

「ステイホーム」というコマンド

今日はアドベント礼拝ですが、アドベントとはクリスマスの直前の4回の日曜日をまたぐ期間のことで、イエス様の誕生の出来事を覚えるクリスマスを待ち望みながら、その準備をする時です。そのように今年もクリスマスを迎えようとしていますが、一方で、まさかこんなことになるとは去年のクリスマスには誰もが思ってもみなかったはずです。

喜びの出来事であるクリスマスを目前にして、この苦しい、不安や恐れに覆われた状況をどう受け止めればいいのか。そうした思いの中で救い主であるイエス様の誕生を待ちわびた人びとの姿を描く聖書の物語を読んでいた時、先ほど読んでいただいた聖書箇所にある一つの言葉が引っ掛かりました。

それは、「おどった」という言葉です。今年世界中を混乱に陥れたパンデミックの中で、「踊る」人びとの姿があり、その姿に励まされたからです。でも、それは星野源の「うちで踊ろう」という楽曲や、彼の呼びかけに連なって音楽や動画でコラボした人たちのことではありません。むしろ、私はこの「うちで踊ろう」という呼びかけに違和感を覚えました。

その違和感を拭うことができないまま4カ月ほど経ったある日、福島県南相馬市在住の作家である柳美里さんのエッセイを読んだ時、「うちで踊ろう」に抱いた違和感が何だったのか理解できました。

そのエッセイは『ゲンロン 11』という雑誌に掲載された「ステイホーム中の家出」と題されたものです(1)。その中で柳さんは、東京の小池都知事の記者会見で「ステイホーム」という言葉を初めて聞いた時、ゆっくり区切って言ったことにひっかかりを覚えたと書いています。その「ステイ・ホーム」の言い方がドッグ・トレーニングのコマンドのように発せられると感じたからです。

ドッグ・トレーニングとは、犬にコマンドを覚えさせることをとおして、主人は誰なのかという上下関係を頭と体に染み込ませ、そして、人間の秩序と支配を犬に自発的に(……)受け入れさせるものです。そのコマンドに俊敏に反応したのが「自粛警察」と呼ばれた人たちです。マスクをつけずに外出する人や自粛をしていないと見なした飲食店を非難・罵倒し、他府県からのナンバーをつけた車に石を投げつける人

びとは、コマンドに忠実な警察犬そのものだと柳さんは書いています。

この記事を読んだ時、「うちで踊ろう」というメッセージも、「ステイ・ホーム」のコマンドを守って、家から一歩も出ずに、支配の秩序から逸脱しない範囲で楽しむためのもの、ご主人様の顔をうかがいながらするものだったのだと気づきました。「うちで踊ろう」というメッセージは、コマンドを出す側にとっては都合のいいものですし、そのコマンドに忠実な人たちからは諸手を上げて受け入れられ、「自粛警察」から取り締まられることもないからです。

だからこそ、「うちで踊ろう」の音楽にあわせるコラボが流行った時、当時首相だった安倍晋三もそれに乗っかるわけです。安倍さんがコラボ動画で見せたくつろぐ姿は、お前らは黙って支配の秩序に従っておけばいいというメッセージを体現するものです。しかし一方で、あんな大きな家に住むことができ、コロナ禍で何の心配もせずに、うちの中でゆっくり過ごせる人はごく一部です。

それゆえにあの姿は、生活や商売への不安の中に置き去りにされた人びとを愚弄するものです。生きることへの不安を抱える人びとに、家にいて踊っている余裕なんてないはずです。現実はそのなのに、「うちで踊ろう」という歌にあれほどの反響が出たのはなぜか。生きることが抑えつけられている人びとの現実を見つめることが過酷だからでしょうか。現実を直視して声を上げるよりも、「うちで踊ろう」と歌うことでコロナ禍をやり切ろうと頑張る自分を演じることの方が楽だからかもしれません。

「うち」から出て踊る人びと

ーブラック・ライヴズ・マター抗議デモで踊る若者たち

そうした状況とは対照的に、コロナ禍で世界各国で外出制限が出される中「うちから出て踊る」人びとの姿がありました。そのきっかけとなったのは、5月25日にアメリカのミネソタ州ミネアポリスで白人警官によって黒人のジョージ・フロイドさんが殺害された事件です。偽札を使ったのではないかという容疑がかけられたフロイドさんを取り押さえた警官が、彼の首に膝を押し付けて、「息ができない」と懇願するにもかかわらず、8分46秒も膝で首を路上に押さえ続けた結果、フロイドさんは殺されてしまいました。

この出来事に対して、「ブラック・ライヴズ・マター」と呼ばれる運動が、アメリカ全土、そして、世界各地に広がりました。「ブラック・ライヴズ・マター」とは日本語にするなら、「黒人の命は大切である、黒人の命を軽んじるな」となります。

コロナ禍での外出制限中にもかかわらず、この運動が大きな規模で広がっていった背景には、一つにはこれまで警官や白人市民によって無数の黒人が殺されてきたこと、そして、黒人を殺した者が無罪放免となることへの怒りがあります。アメリカ社会の構造そのものが人種差別のうえに成り立っていることによって、黒人の命と尊厳が軽んじられてきたことへの怒りと正義の実現を求める声があるからです。

ブラック・ライヴズ・マターが拡大したもう一つの理由は、新型コロナウイルスです。新型コロナウイルスによって、マイノリティは白人よりも死亡率や罹患率が高くなるなど大きな影響を受けています。マイノリティの中には感染リスクの高いエッセンシャル・ワーカーとして働く者が多く、人種間の経済格差が生まれています。また、その格差ゆえに貧しい家庭は、家賃の低い集合住宅で生活していること、移動手段も公共交通機関を利用する割合が高いことなどによって、感染しやすい状況に置かれています。

つまり、構造的な人種差別が、こうした死亡率や罹患率の違いとなって表れたわけです。ブラック・ライ

ヴズ・マターの声は、こうした構造的な差別が生み出し、許容してきた暴力をはじめとする諸問題に対して上げられたものです。そして、この怒りの声を上げて抗議する者たちの中に、「うちから出て踊る」人びとの姿がありました。

「ブラック・ライヴズ・マター！黒人の命を大切にしろ、黒人の命を軽んじるな」と叫んで抗議する黒人の若者たちは爆音でヒップホップの楽曲を流し、それにあわせて激しく踊ります。中には、デモの群衆を解散・鎮圧するために集まってきた警察や州兵に対峙する中で、その前に進んでいって踊る若者の姿がありました。

アメリカでは日本よりも厳しい外出制限が出されていたにもかかわらず、命の尊厳を守れと訴える若者たちはストリートに飛び出して踊りました。それは、「ステイ・ホーム」という支配のコマンドに従って「うちで踊る」のとは真逆の在り方です。

黒人の若者たちはそんなコマンドに従順な誰かの呼びかけに応じて踊るのではなく、自分の命の尊厳の証しのために踊るからです。その力強い踊りは、自分は今ここで生きていることを証しするものです。そして、その踊りは自分たちを抑えつけ、虐げ、ありとあらゆるものを奪い取ってきた力に決して屈しないという態度を示すものです。

胎児が「おどった」

ブラック・ライヴズ・マターは3人の黒人女性によって始められた運動ですが、その一人であるパトリース・カラズさんはこの運動はスピリチュアルな運動だと述べています。

広い意味での宗教性を意味するスピリチュアリティの語源となったのは、ラテン語で息を意味するスピリトゥスという言葉です。このことは、神の形にかたどられた土の塊に神が息吹を吹き込んだことで、人間は生きようになったという創世記の記述と関係しています。つまり、スピリチュアリティとは、命を生み出し、それを支える大いなる存在である神を信頼することから生きることによって希望を見いだす力を意味するものです。

では、ブラック・ライヴズ・マター運動のスピリチュアリティとは何か。この運動のデモでは、「彼の名前は？彼女の名前は？(What's his name? What's her name?)」「彼の、彼女の名前を呼んでくれ(Say his/her name)！」というリーダーの呼びかけに対して、群衆が警官や白人至上主義者の暴力によって殺された黒人の名前を叫びます。

ブラック・ライヴズ・マターは抗議運動であるだけでなく、このように国家的暴力や差別による死者を思い起こす営みです。それは、暴力の行使によって人間としての存在や尊厳を奪うことはできない、死者は今も私たちと共に在るという確信に立つものです。

その確信ゆえに、ブラック・ライヴズ・マターに連なる人びとは、暴力や差別に覆われた現実屈すること拒絶し、命を生きることそのものに希望を見いだします。そしてその希望が肉体をとおして現れたのが、デモに参加した若者たちの踊りです。

一年前のクリスマスには、誰もがこんな状況になるとは思ってもみなかったはずです。しかし、別の言い方をするなら、どんな状況にあっても、クリスマスはやってくるということです。そして、肉眼では見ることのできないウイルスによって突如危機に陥ったこの世界の中で、何百年にもわたって暴力や差別という

危機に晒され続けてきた人びとが、自分たちを抑えつけようとする力に屈することなく、今なお立ち上がり、それだけでなく、踊っている。

その姿はクリスマスの物語に重なります。黒人たちが何百年にもわたって暴力や差別に苦しんできたように、いまだ2000年前のパレスチナに生きたユダヤ人たちも、ローマ帝国の植民地支配のもと、暴力と差別に満ちた現実の中で、多くの命が奪われる危機の中を生きてきたからです。

そうした時代・社会に生まれようとする小さな命が胎内で「おどった」と、聖書の言葉は伝えています。聖書はキリスト教信仰の書物である一方で、人間という存在について描き出すものです。つまり、人間に備えられたスピリチュアリティ、苦難の中で命を見つめる眼差しから希望を見いだす力について記したものです。救い主の到来を告げる物語の中で、その知らせを受けた一人の女性は自分のお腹の中で蠢く赤ちゃんを「おどった」と表現しました。それは、彼女が命を見つめる中で希望を見いだしたからです。そして、この物語は、希望を見いだす力が人間に備えられていることを鮮やかに描き出すものです。

私たちは、先行きの見えない、不安や恐れに覆われた世界の中を生きています。しかし、その現実の中に踊り出るように躍動する命の力、希望を見いだしていく力は、私たちにも秘められています。

〔注〕

1 柳美里「ステイホーム中の家出」https://genron-alpha.com/article20200818_01/ (2020年12月8日アクセス)

2020年12月9日 今出川水曜チャペル・アワー「アドベント礼拝奨励」記録